623

月刊

言語

2008
12
Vol.37・No.12

2008年12月1日発行（毎月1日発行）第37巻第12号通巻449号　昭和47年8月12日第3種郵便物認可

90 創業90年
大修館書店

特集　古典語・古代語の世界

“世界言語遺産”をめぐる旅

ラテン語　逸身喜一郎
ギリシア語　池田黎太郎
古インドアーリヤ語　後藤敏文
アラビア語　小杉　泰
ヘブライ語　池田　潤
古代教会スラブ語　恩田義徳
古代中国語　松枝　到
古アイルランド語　平島直一郎
シュメル語　小林登志子
アヴェスタ語　後藤敏文
文字から探るフェニキア語の世界　桑原俊一

◆巻頭エッセイ
建畠　哲
米沢富美子
新田　増

◆リレー連載
私のフィールドノートから
トーロ語　梶　茂樹

ラングスケープ
スポーツと
言語行動・言語文化
陣内正敬

特集◎古典語・古代語の世界

古インドアーリヤ語

古代インド文化の精華を伝えるヴェーダ語とサンスクリット

後藤敏文
（ごとう　としふみ）

仏教、ヒンドゥー教、リグヴェーダ、パーニニの文法、…。古代インド文明が現代世界に遺した文化遺産は数多い。精緻に組織された言語であるヴェーダ語やサンスクリットがその文化の基盤をなし、そうした言語の解明から印欧語族の行動原理に迫る道筋が見えてくる可能性もある。

一　「サンスクリット」

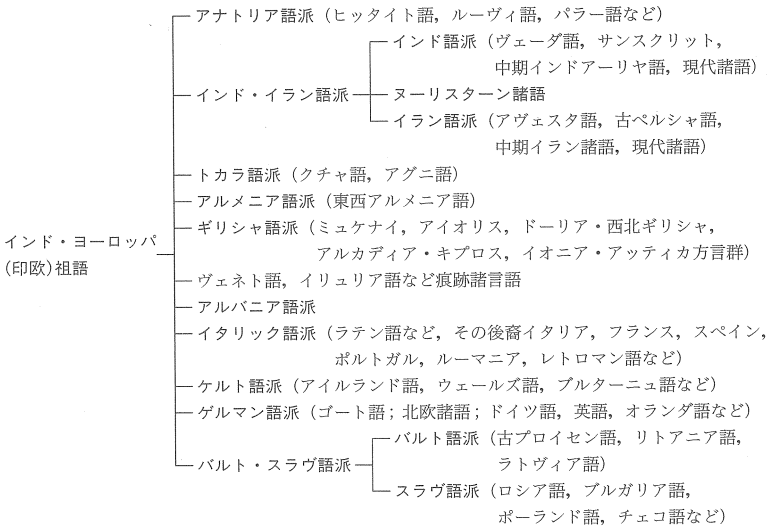
「サンスクリット」という名称自体は比較的よく知られている。インドの遠い昔の言語と理解される一方、インドに行けば習えると思う人もいる。仏典と関連づけて考える人も多かろう。学習経験者や興味を持つ人も多いようだ。しかし、その言語の具体像は見えにくい。原因の一部は、インドの言語文化が長い歴史の中で変化していったにもかかわらず、特殊な局面だけを切り取って見ていることにある。また、学習のはじめに標準文法、規範文法を「教え込まれ」、その無理を引きずったまま原典と向き合うことにも一因があろう。「サンスクリット」は読み書き話す対象としては使い道が限られる。インド学者階級の共通語という面は確かにあるが、それは言語の自然な展開に即した姿ではなく、人工的に規範をなぞっているに過ぎない。古代インドの文献や言語の真の意義は、学習を超えて研究する態度で接する時に初めて顕れる。敢えて言えば、ホメーロスやギリシャ悲劇を味わい、現代に生きる我が身を重ねるというような、誰にでも開かれた文学作品は事実上ない。文法を習ってそれ

を道具に何かを得るというよりも、言語そのものと格闘しなければ文献の理解にまで到達できない。その際、助けとなる文法は学習された「規範」の中にではなく、原典の示す言語事実、言語現象と対峙している我々の理性の中にこそある。そのことさえ押さえておけば、古代インドの文献は我々に理性の精妙さそのものを確認させ、到達された思考の中味の重大さを明かしてくれる。必要なのは簡単な原理、出発点となる活用表などだけである。ただし、音韻、語形形成法、形態、統語論、複合語の原理、古い文献に残るアクセント、韻律などに亘って、学術的に達成された成果の基本部分、チェックポイントを押さえておかないと原典理解に困難があるのも事実である。この点は最近の仏典研究に特に強調すべき点である。その種の文法学的成果、文献学的道具が主として印欧語比較言語学を背景に、歴史文法の分野で積み重ねられてきたことが事情を一層難しくしている。辞書、文法書、研究書の本格的利用にはドイツ語が不可欠である。

「サンスクリット」という名称は曖昧に用いられることが多い。語そのものは『ラーマーヤナ』に「正しく構成された話し言葉」（サンスクリター・バーシャー）として現れるのが初出とされる。紀元前後に遡るであろうか。バーシャーは「話し言葉」で、スクリターは「作る」を意味する動詞の過去分詞女性単数主格形、語幹は普通「クリタ」である。「ス」は s mobile「（語根の前に）出入りする s」とよばれ、インド・ヨーロッパ（印欧）祖語の段階で既に化石化していた由来不明の要素である。「サン」は「完全に、一緒に」を意味する前置詞で、「それぞれの部材を設計図の正しい場所に配置して完全に」の意味で用いられる。同じ構成から成る名詞サンスカーラは「正しい構成、構成してものを作り上げること」を意味し、漢訳仏典で「諸行無常」という時の「行」がそれに当たる。

「サンスクリット」は厳密には紀元前五世紀頃以降の言語段階を意味し、主に紀元後の「古典サンスクリット」を指す。特殊な場合には「叙事詩のサンスクリット」、「仏教混交サンスクリット（仏教混交梵語）」などと限定を付して用いる。古いヴェーダ文献をも包摂する総称には「古インドアーリヤ語」がふさわしい。古典文献はグプタ朝（後三世紀以降）の復興運動によるところが大きく、当時の日常語は既に中期インドアーリヤ語を経たものであった。古典サンスクリ

●インド・ヨーロッパ祖語からの分岐展開



ットは、パーニニが定めた（文中において実現する）語の形成法を教える約四千の規則に則るとされるが、実際には、それらは各時代の日常語を古い規範に移し替える際の理念的定規の役割を果たしたものと考えられる。パーニニ自身は紀元前三八〇年頃、保守的な言語をとどめていた西北インドに生き、状況証拠からはアケメネス朝に仕えた知識人と想像される。同時代の文献には「シュラウタ・スートラ」（大規模祭礼の規範集）の新層や、「グリヒャ・スートラ」（アーリヤ家長の一生の家庭内儀礼を規定）の最古層などがある。

パーニニ文法は精度の高い「プログラミングの体系」で、それだけでも人類の知的遺産である。同時代の言語について達成された最高の記述、最初にして最高の構造主義文法と賞讃されることもある。今日のコンピュータ産業にはインド出身者の活躍が多く見られるが、パーニニ文法がインド知識階級のバックボーンとなっていると指摘する人もいる。

インドアーリヤ語の古い段階は「ヴェーダ語」である。アフガーニスターンからカーブルの峠を越え、インダス河川群上流域に入った「アーリヤ」の人々が、宗教儀礼に用いることばを精選し、議論論証をも含めて編集した聖典群が「ヴェ

ーダ」である。最古の『リグヴェーダ』は前一二〇〇年頃編集固定されたものと思われる。英語圏ではヴェーダ語をVedic Sanskritと呼び習わしてきたため、「サンスクリット」を最古層から古典期までを含む総称として用いることがあるが、正確には、上述のごとく「古インドアーリヤ語」がふさわしい。「アーリヤ」はインドに入った人々の自称と言える。これに対し、イラン系諸部族に展開した人々は、語頭の短い「アリヤ」を自称していた。いずれもアリ「（敵または味方の）部族に属する者」からの派生形で、それぞれ「部族に属する」ないし「部族の風習に従う」意味に解すのが妥当と思われる。「イーラーン」は「アリヤの人々の」を意味する古イラン語形「アリヤーナーム」から変化した現代ペルシャ語形である。インド・ヨーロッパ祖語からの分岐展開次第の概略については右図を参照。

二　動詞組織とアスペクト語幹

古インドアーリヤ語の動詞は「時制」という観点から組織されてはいない。アスペクト語幹が主体をなすが、動作を経過中の相（imperfective aspect、途中観）において表現する（突き詰めれば現在進行形）「現在語幹」と時間的広がりのない相（perfective aspect、全体観）で表現する「アオリスト語幹」の二つから出発している。「アオリスト」は「限定されない」を原義とするギリシア文法用語からの借用。これに、主語が到達した状態を表現する「完了語幹」が加わる。未来語幹はもともと特殊な現在語幹で、リグヴェーダでは分詞形が多く、主語の意図を表す機能が主である。現在、過去、未来の「三時制」は、ハードウェアにきれいに対応しない。「現在」は全時代を通じて現在語幹直説法（など）に担われる。「未来」は元来後に述べる接続法が担ったが、未来語幹によって表現されるようになり、接続法は一人称命令形に痕跡をとどめる。「過去」には現在語幹の過去直説法（imperfect）とアオリストの直説法とがあり、アウグメント（語幹の頭に付加されるa）による過去の表示を伴う。完了形（完了語幹直説法）も次第に過去の叙述に用いられるようになる。時代によって多少異なるとしても、ヴェーダ語にはこれら三者に用法の区別があるが、叙事詩や古典サンスクリットになると、過去表現のヴァリエイションに過ぎない場合が多い。ヴェーダ散文後期（前七世紀後半）には、完了形が

語りのテンスの代表になる。物語を「イティハーサ」と呼ぶが、元々「であったとさ」を意味し、「アーサ」の部分は「ある」の完了形三人称単数能動態である。マハーバーラタなどの叙事詩も基本的にイティハーサの範疇に入る。この点、アオリスト直説法による会話体過去形から発展した仏典の語りと異なる。

表現内容に話者の態度表明を付加する法（ムード）には直説法、接続法、願望法、命令法があり、他に、時の表示や話者の態度表明の要素を持たず、数・人称・態のみを表示する「インジャンクティーヴ（指定法）」がある。接続法の機能は未来と話者の意志とであり、願望法は可能性と話者の願望を表す。アオリスト語幹の直説法は直近の過去と過去の個別事項の確認に用いられる。アオリスト語幹はリグヴェーダでは各カテゴリーをもつが、より新しい他のマントラ文献（祭礼用のことばの集成、前一〇〇〇頃から）では大幅に後退し、散文文献（前八〇〇以降）になると、特殊な願望法、化石化した命令形を除き、直説法（従って過去）のみになる。中期インドアーリヤ語（パーリ、プラークリット）の過去形はヴェーダ時代の会話に多用される確認の用法から展開したアオリスト直説法に遡る。*mā*を伴って禁止に用いられるアオリスト指定法は古典期まで継続して用いられ、中断の要請に用いる現在語幹の指定法と対をなしていた。

現在語幹の形成法をパーニニは十類に分類した。アップラウト（アクセントをもつ母音の保持に関わる音節構造交代現象）とアクセント位置、接尾辞、語根重複、接中音節（nasal infix）などによって、二大別十数種の形成法がある。語根の持つ意味要素から、起動、継続、繰り返し、使役、自発などの意味を添加し変化させる動機が各形成法に確かめられ、論理の貫徹には驚かされるものがある。「歩く」を意味する動詞はパントマイムを思い浮かべると解りやすい。例えば*gácchati*は「踏みしめる」という瞬間的動作を表す語根*gam*から起動を表す接尾辞によって作られている、つまり「踏みしめ始める」。*jigāti*は同じく「股を広げる」の繰り返し（重複）による、即ち「跨ぐ動作を繰り返す」。*pádyate*は「（体重が）落ちる」意味の語根に、自然に起こる動作を示す接尾辞を付して歩く動作を表す。アオリスト語幹用にもアスペクトの変化に伴う加工法が数種ある。語根の語義が極端な瞬間的動作の場合には、経過中の相で表現する現在語幹

を作らない。逆に、強い継続動作の場合には全体観（完了相）で表現するアオリスト語幹が形成できない。この場合、補完活用（suppletion）が起きる。動詞 *as*「ある」は現在形 *ásti* を作るが、アオリストは *bhū*「なる、生じる」に補われる。ここには、英語などに見られる *be* 動詞の不規則活用の原型が確認できる。アオリスト語幹 *dárś-*「目にとめる」は現在語幹を作らず、*páśyati*「眺める」が補う。

三　名詞

名詞（実体詞と形容詞）は性数格の組み合わせによって活用する。男・女・中の三性、単・両・複の三数、主格、呼格、対格（目的語）、具格（道具、随伴）、奪格（起点）、与格（間接目的語）、属格（所有）、処格（場所）の八格である。インドとイランの古い言語は、一対を成すか否かにかかわらず、二者には両数（双数、dual）を用いる。日本語では必要に応じて性数格に当たる要素を継ぎ足すことができるが、古い印欧語の特色として、表現すべき組み合わせを予め選ぶ必要がある。いわば、複雑なギアチェンジを用いる言語である。さらに、古い段階では副詞の使用が発達しておらず、名詞の修飾語として処理される傾向が強い。「彼は東へ向かって行く」というところを「東へ向いた彼が行く」と表現する。日本語の「血の雨が降る」（血が雨として降る）に比べられるところがある。複合語が発達しているが、活用のわずらわしさを補う意味もあろう。

四　ヴェーダ語

動詞について見たように、ヴェーダ語内部にも発展段階がある。『リグヴェーダ』は、内容・形式の保守性と相俟って、画然と古い段階を示す。リグヴェーダ内部にも新古の言語事実が混在するが、末尾の第10巻に新傾向が多出する以外には「層」を云々することはできない。詩人は祭官家系に属し、カヴィ「見者」、ヴィプラ「（霊感に）うち震える者」、リシ「荒ぶれる者」などと呼ばれた。彼らは伝統に則り、往時本来の姿を模して（しかも、その時々に新たな情熱を込めて）讃歌を作り、他方、独自の題材を盛り込む努力をした。詩人には古い語形を用いる「詩人の自由」があった。今日、短歌や俳句に古語が用いられる事情と似る。例えば、「人、人々」を意味する短短二音節のジャナ *jána-* は、長短が求められる

音節にも用いられる。歴史文法によって確かめられる *jáHna-* (*jáH|na-*: 長短) というラリンジャル（印欧祖語に想定される三種の喉音）の一つが消滅する前の語形、またはその記憶が詩人たちの語彙の蓄えの中に生きていたからである。

リグヴェーダには、例えば、十二の不定詞形成法が見られ、各形式に属する語形も多い。『アタルヴァヴェーダ』他のマントラでは減少し、散文文献では *-tum* という形に収斂するが、依然計五種の形成法が固定された用法に残る。古典期のサンスクリットでは *-tum* のみになる。

リグヴェーダを始め、他のマントラ、ヤジュルヴェーダに収められている「ブラーフマナ」と呼ばれる散文、『ブラーフマナ』の名を冠して編集された文献群の古いものなどは高低アクセントを伴って伝承されており、文法分析、印欧語比較言語学に重要な情報を提供する。パーニニの規則はまさにこのアクセントを前提としている。この点でも、パーニニの言語は古典期の言語と隔たる。古典期のアクセントは語の構成法と無関係な外的音節構造による強弱アクセントと説明されるが、現在の発音を再投影したもので実態はない。

五　サンディと文字

古インドアーリヤ語の学習・研究に常に障碍となる文法事項にサンディ「（音韻）結合」がある。古インドアーリヤ語のテキストには、辞書に挙げられる語形ではなく、前後の単語が発音上変化融合した形が採られている。リグヴェーダ第4巻冒頭は *tvāṃhyagnesádamitsamanyávo*（トゥヴァーンヒャグネーサダミッツァマンニャヴォー）と、一続きに伝承されている。韻律や文法から推定される作詩当時の姿は *tvadṃ hi agnai, sádam it samanyávau* である。意味は「君をこそ、アグニ（火）よ、何時でも、意図を一つにして…」。英語ならば、発音通り *naisəmicu* と書かれている文から *nais tū mīt yū* つまり *nice to meet you* を復元するような、単語に分ける作業が必要となる。その原因は、言語・文法の把握が祭官階級（ブラーフマナ。文献名とはアクセントが異なる）の営みから出発していることにある。彼らが負っていた役割は正しいことばの「発語」にあった。「ブラフマン」とはそもそも伝統や文法に則り、真実を語る、発語されると必ず実現することばを意味したのである。リグヴェーダの続

け読み（サンヒター）を単語に分割した学者もあった。パーニニに百年以上は先行するシャーカリャである。単語の分割に基づいて、単語の順番を様々に入れ替え、組み合わせる暗唱法が考案され（無論サンディで固められた）、リグヴェーダを今日まで正確に伝承することを可能にした。しかし、彼らの意識はあくまで発語された形そのものに置かれ、パーニニはこれを文法規則の到達目的に設定した。それ故、我々ははじめにサンディの法則を習わねばならない。古典期の人工的な詩文や学術書は、我々が学習するサンディの規則に合致するように書かれている。しかし、言語はあくまで自然なものであり、文法が先にあるのではない。従って、「自然な」テキストには、我々が習う規則とは合わない現象も現れる。韻律の研究とも相関関係にあり、単純に暗記して済む事柄ではない。

もう一つの困難は文字にある。バラモン（婆羅門）階級は、元来、使えたはずの文字を採用しなかった。ここにもことばの文化を独占しようとする彼らの意図が伏在する。現在標準的な文字はデーヴァナーガリーというヒンディー語にも用いられる音節文字である。古インドアーリヤ語の構造は音節文字には合わない。子音と母音とを分かつフェニキア起源の文字こそがふさわしく、単語を分けて表記する可能性も広がる。しかし、写本もアショーカ王碑文（前三世紀後半、各地の中期インドアーリヤ語による）も全て音節文字によって書きとどめられた。

六　インド・ヨーロッパ語族

古インドアーリヤ語は、インド・ヨーロッパ祖語から分かれて展開した。前十四世紀にはメソポタミアにミタンニ王国を建設した一派の資料が楔形文字で遺されている。イランの諸言語との比較からは、前二〇〇〇年以前に遡るインドイラン祖語が復元できる。今日想定される印欧祖語は、どのように修正提案がなされるとしても、古インドアーリヤ語と、それに基づくインドイラン祖語の具体像が提供する骨格と諸部材抜きには語れない。古インドアーリヤ語研究、印欧語比較言語学は言語学の成立に実質的な寄与をなし、方法や道具立てをもたらした。古インドアーリヤ語の文献学的言語研究から、将来の言語研究に新たなチェックリストがもたらされる可能性も依然としてある。

今日動き出している「世界史」には、印欧語族の拡張が大きな基盤をなしている。世界史と人類のあり方そのものを、綺麗ごとではなく検証する必要があるように思われる。ヒッタイト王国、ミタンニ王国、海の民、ギリシャ諸部族、アレクサンダーの遠征、ローマ帝国、ゴート族やフランク族の移動、英国の成立、ノルマンの遠征、新大陸等々、印欧語を話す人々の文化が、多くは暴力的に範囲を広げてきた。その原理を確かめ、世界史を批判的に理解するためには印欧語族の文化を源からたどることが必要である。その際、リグヴェーダを始め、古インドアーリヤ語で遺された多量の文献は第一級の資料的価値を持つ。特にヴェーダ文献の解明はこれからである。

七　インド文化と古インドアーリヤ語

「アジア」の諸文化にとって仏教研究は特に重要である。仏教も成立に至る必然性に立ち返って解明する必要がある。最近のヴェーダ文献研究は、仏教の基本部分が、ヴェーダの祭式解釈の延長上に展開した「業」と「輪廻」の公理を乗り越えるべく意図されたものであることを明らかにした。仏典の本格的研究には、ヴェーダ文献以上に高度な文法研究が必要となる。パーリ教典には未だに決定的な学術文法が存在しない。よく知られている筈の般若経典類、「浄土三部経」や「法華経」など大乗教典の言語は特に難度が高く、内容以前に解明されねばならない課題が山積みである。ヒンドゥー教文化の解明にも、文献を歴史的にたどる研究が欠かせない。

バクトリア、マルギアーナには、紀元前三〇〇〇年紀から豊かな都市文明があり、インド・イラン共通時代の人々はこれと遭遇して重要な影響を受けたものと推測され、その考古学的発見に対する関心が高まっている。楼蘭（ロプノール）やさらに東方の考古学的発見もやがて関わってこよう。インド内部ではインダス文明とアーリヤ人たちとの関係、その後のインド文化展開の具体像が解明を待つ。それら全てに亘って、古インドアーリヤ語文献は欠かせない資料である。十九世紀以来の研究史は、今やっと真の文献理解に必要な条件を整えつつある。

（東北大学大学院文学研究科／インド文献学・言語学）

特集◎古典語・古代語の世界

アヴェスタ語

西欧文明に衝撃を与えたゾロアスター教のことば

後藤敏文
（ごとう　としふみ）

1　アヴェスタとアヴェスタ語

『アヴェスタ』は「ゾロアスター教」聖典の総称で、中期ペルシャ語アパスタークに由来する。原意は「讃歌集（讃え添えるもの）」と思われる。かつて存在した全聖典の四分の一が現存するとされる。開祖 *Zarathuštra* の名は「長生きする駱駝を持つ者」と解され、*Zoroaster* はギリシャ語に置き換えられた *Zōroastres* に由来する。姓はスピターマ *Spitāma*、「輝く攻撃力を持つ者」と解される。伝承では紀元前六〇〇年前後の人とされるが、相対年代からはより古い時代が示唆される。前一〇〇〇〜八〇〇に置かれることが多い。ゾロアスター自身に帰せられる「ガーサー」（*gāθā* 「歌」）が『リグヴェーダ』（前三〇〇頃編集固定）より幾分古風な言語形態を示し、インドイラン共通時代の現象をより多く残すことを重視すると、さらに古い年代に遡る可能性が高い。彼は旧来の遊牧・略奪社会を変革し、社会制度を重んじる定住牧畜生活を指向した革命家である。元々インドイラン共通時代に遡る主要祭官職（ザオタル、インドのホータル）の出で、西北イランのメディア族出身と伝承されるが、その可能性は残る。彼は王（カウィ「見者」、インドでは祭官詩人の意味になったが、イランでは王侯の意）ウィシュタースパの庇護を受け、布教と社会改革に成功した。活動域はイラン世界の最東部、現在のアフガニスタン、おそらくヘーラート（*Haraiva*、アレイア、インドにもほぼ対応する河川名サラユがある）あたりを中心に、これとメルヴ（マルギアーナ）、バルホ（バクトリア）を結ぶ三角地帯に想定される。その後、より南の、現在のカンダハルを中心とするアラコースィアに拠点を移したことが方言形の介在から解る。アラコースィアの原語はハラウワティー、インドのサラスヴァティーと同語で、「池を持つ（川）」の意である。

キュロス（クル）二世（在兇-吾三）に

始まるアケメネス（ハカーマニシュ）朝ペルシャ帝国の国教となり、イスタッフル（現シーラーズ、ペルセポリスの西南方）にメディアの僧侶を中心とする僧院が設けられ、アラコースィアと東西二大拠点を形成した。王宮にメディアとアラコースィアの僧侶が伺候していたことがペルセポリスのレリーフの衣装などから窺える。ペルシャ（パールサ）は西南イランの部族名、言語は古ペルシャ語で、ダリウス大王の碑文などに遺る。

ゾロアスター教は徹底した善悪二元論を説く厳格な宗教で、古来の神々ダエーワ（インドのデーヴァ、ラテン語のデウスと同起源、「天に存する者」）は神ならざる神、悪魔として排斥された。アフラ・マズダーを唯一の神とし、マズダヤスナ「マズダーを讃える」宗教を自称した。アフラはインドのアスラ（漢訳仏典の阿修羅）に当たり、「大家長、首長、主」を語源とする。インドイラン共通時代の人々は社会制度の神々を（おそらく移動の途中で遭遇したバクトリア・マルギアーナの先進文明から）取り入れたが、その筆頭が王権を体現するインドのヴァルゥナであり、アスラの称号をもって呼ばれることが多い。ゾロアスターはこれに当たる神格を理性の神マズダーに置き換えたものと思われる。マズダーはインドの抽象名詞メーダー「知恵」に当たる語を男性名詞化したもので、「思考を定め置くこと」を原義とする。ゾロアスター自身は「知恵（マズダー）…主（アフラ）であるところの」と補足的に表現したが、信徒たちの新アヴェスタ語文献ではアフラ マズダー「主である知恵」の語順で並置され、アケメネス朝碑文では「アフラマズダー」と一語の神名に変化していた。

『アヴェスタ』の言語は東南イラン方言に分類される。二方言があり、ヤスナ「礼拝」に収められたゾロアスター自身のことばを含むと考えられる「ガーサー」と、同時代の信者たちが礼拝用に用いた「ヤスナ・ハプタンハーイティ」（礼拝七篇）は古アヴェスタ語による。それ以外の部分は、より新しい傾向を示す別方言、新アヴェスタ語で著されている。ヤスナの残りの部分、ヤシュト「讃歌」、規定集ウィーデーウダード「ダエーワを退ける法」、儀礼書ニーランギスターンなどがこれに属する。新アヴェスタ語には他の方言要素も混ざり、伝承の崩れた部分も多い。開祖が厳しく排斥した旧来の要素が再浮上し、例えば、ハオマ（インドのソーマ、おそらく麻黄）を讃える讃歌が存在する。アヴェスタ語を引き継ぐ言語は存在しない。イラン諸方言中、両アヴェスタ語だけが示す特徴に *-asa-* ∨ *-aŋha-* があるが、この変化を示唆するような方言は今日まで見出されていない。

2 アヴェスタ語の研究

アヴェスタの原典研究と後のゾロアスター教研究との間にはいささか断絶があ

る。アヴェスタに関する基本的研究は、バルトーロメ（一八五五―一九二五）によるイラン語全般に亘る文法基礎の確立、古イラン語辞書の出版をはじめ、印欧語比較言語学の成果に負うところが大きい。ホフマン（一九二五―一九九六）は、古イラン語研究をヴェーダ文献研究と一体のものとして扱うことにより、新展開をもたらした。彼は比喩的に「アヴェスタの最良の辞書はグラースマン（リグヴェーダ辞書）、最高の参考書はアウフレヒト（リグヴェーダの原典出版）」をモットーとしていた。ケレンスの諸業績もこの流れの中に位置する。ガーサーの晦渋さはその宗教的メッセージのあり方に関連するであろう。古風で厳格な語形、語彙、表現の使用には、ゾロアスターが印欧語比較言語学の成果を学んでから語ったのではとさえ思わせるところがある。アヴェスタ研究がイラン学の専門家よりも印欧語学者によって導かれてきたことも首肯できる。

イラン学研究者の重点はサーサーン朝以降のパフレヴィー（中期ペルシャ語）、パルティア語（中期メディア語）等によるゾロアスター教文献に置かれてきた。ヘンニング（一九〇八―一九六七）以来、中央アジア等から出土した紀元後の文献による中期イラン諸方言（コータンサカ、ソグド、バクトリア、コワレズミー語）の研究が盛んである。仏教、マーニー教、キリスト教、世俗文献などの資料がある。今後は、歴史の流れを上から辿ってきた古イラン語研究と、イラン諸言語の流れを遡る研究とが融合する展開が望まれるが、未だに道は遠い。

3　アヴェスタと諸宗教、現代世界

『アヴェスタ』そのものの研究は言語研究に集中してきた感がある。晦渋な原文に接する時、正しい段階を踏んできた結果のように思われる。文法にはインドのヴェーダ文献の理解が前提となり、言語のおおよその姿はこれに近い。

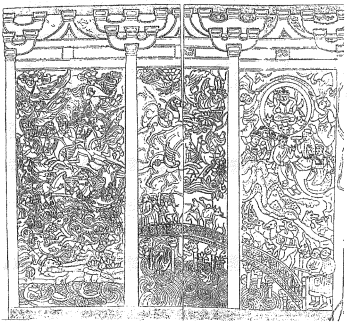
しかし、その宗教の中味に関わる研究は、世界史を理解する上で別の重要性を持つ。まず、東方から見てみたい。インドは山脈と海とに囲まれた袋のような文化圏を形成していたが、西北には太古より常に口が開いていた。また、その出口は中央アジアに接する。そこは往古より諸文明が交錯し、国際文明の舞台であった。死後の道を巡る思弁はインドでは「輪廻」に収束するが、その展開過程のそこここに、イランとインドとに共通する要素が見出される。大乗仏教、仏教美術などにも影響があったはずである。ゾロアスター教は後五世紀以降中国にもたらされ、ソグド商人の活躍を背景に、唐代には「祆教」として隆盛を見た。

西方への影響はより大きい。キリスト生誕にかけつけた三博士はギリシャ語のマゴスであるが（一般にラテン語マグスの複数形マギで呼ばれる）、古ペルシャ語 *magu-*（主格 *magus*）からの借用である。メディアの僧侶階級の者を意味す

る。原義は僧院の学生に求められ、ゴート語の *magus*「若者、学生」と同起源の印欧語であろう。三博士には、ゾロアスター教が西方世界に有していた権威が読み取れる。ゾロアスター教は、最後の審判、終末論を、確立された概念としてユダヤ教、キリスト教にもたらし、「預言」に道を拓いた。強烈な善悪二元論、排他的拡張主義を拠り所とする世界観の保持は、インドに入ったアーリヤ人には見られない性格で、イラン、メソポタミアとその西方という、自然障壁に守られない「国際社会」の中で醸成されたものであろう。信じる者選ばれた者とその他の敵対者とを峻別し、政治的色彩を強く帯びる一神教的性格も同じ基盤に立つ。特に、バビロン捕囚解放（前三三八）以後、ユダヤ教に与えた影響は従来から指摘されている。ゾロアスター教において太陽神として崇められたミスラはヴェーダのミトラに当たり、「契約」を原義とする。ローマ帝国の傭兵に多かったイラン系サカ族（スキュタイ）からヨーロッパ下層兵士の間に広まった「兄弟仁義」の宗教に基づくと思われ、夜の太陽の再生を祈念する儀礼を中心に据えていたらしい。

ゾロアスター教は長く「オリエント」の重要な宗教であり続け、後三世紀にはペルシャの貴族マーニーによる新宗教が起こった。アウグスティヌス（三五四―四三〇）はマーニー教からの改宗者である。グノースィスと総称される宗教思想体系は同じ地盤から生じている。同源同時代のアヴェスタとインドのヴェーダとを比べると、アヴェスタには絶対者と向き合う一個人の切なる感情、信仰、絶望、願いが目を引く。原典に基づくアヴェスタ研究は決して過去の遺産に止まらない。ことばはそれ自体全て人類の掛け替えのない文化遺産であるが、アヴェスタ語は最重要世界言語遺産の一つであり、言語としてもそれが担う中味においても、今後の解明が切に望まれる。

（東北大学大学院文学研究科／
インド文献学・言語学）



ソグド商人史君（Wirkak）墓石槨　後6世紀前半、西安出土。J. A. Lerner, 〈http://www.bulletinasiainstitute.org/m0.htm〉による。石槨に記されるソグド語文には吉田豊氏による解読研究がある。史君一家が裁きの橋（アヴェスタの「償う人の橋」）を渡っている。家族が揃っていることは、裁きの時が至るまで魂が天界に住むという終末論を前提とする。橋の手前には祭官が立ち、その上にイマの2頭の番犬が見える。イマは人間の始祖で、死者の国の王となった。古アヴェスタ語 *Yəma-*、新アヴェスタ語 *Yima-*、インドの *Yamá-*、後の「閻魔」である。右上が（肉体を払い落として入る）最終的天界と思われる。因みに、パラダイスの語はくつろぎの庭園を意味するアヴェスタ語 *pa^{i}ri-daēza-*「壁を囲む庭」、古ペルシャ語 *para-daida-*「（内）壁の外側にある（庭）」に遡る。